

園長だより NO.45



そもそも、大人が考える発表という言葉の概念には 世間一般に知らせることや表向きに知らせることを連想させ、時にはある一定の水準までの教育や獲得したものを見せていただけるものと考えてしまいます。

当然、保育者も成果主義、教え込み、一寸のずれもない内容を構成し子ども達に取り組みさせていこうという意識を強く持つことにつながります。

「 目指しているものは何 」

子ども達が主役、中心になって作り上げていけるような活動を考えています。そのためには年齢毎、クラスの目標やねらいを十分に実践の中でふまえ取り組みたいと考えています。

「今年は〇〇の劇がいいかな」「何をしよう」と題材の選定に忙しく走る前に、活動の主目標やポイントを明らかにして子どもが活動できる内容（題材）を選び、選ばせていくことが大切と考えます。

プロセスが大切

子ども達が作り上げていく過程が大切劇の会、当日も私達は大切にしていますが、それ以上に過程を大切にしています。いかに子ども達がいきいきとし、仲間と共につくりあげていく事に楽しさを感じてもらえるのか、大人が考えたものをシナリオ通り、口移しに台詞を言い、演じるものではありません。

より子ども主体！保育者主導からの脱却を意識し取り組みたいと考え実践に取り組んでいます。

日常生活で子どもが楽しんで無理なく行ってきたことをベースに活動を考えていきます。劇の活動が大人の考えたシナリオの獲得や覚え



込みになってはならない、できるだけ、その活動が生活の中の遊びとおなじ位置づけになればと思っています。

「 しつかりと視点をおいてみること 」

ある保育者のフェイスブックの投稿が脳裏に思い出される。劇の取り組みについては「どう表現するのか 又はさせるのか」ということが話題になるが「何を表現するのか？」がはっきりしないことが多いという。 その保育者は簡潔に「そのお話の面白さである」と考えているという、そのお話の面白さをつかみ、表現すること、それを一緒にやる仲間とすり合わせながらはっきりさせていく過程が重要であると言う。

お話、絵本を丹念に読み聞かせ、子ども達の好きなお話を劇化していく、子ども達にとってそれぞれの面白さが異なることもあれば、みんなが面白さを感じる場面もある。 それを遊びの中ですりあわせ、みんなの楽しい劇あそびになっていく。

「5歳児では どうだろう」

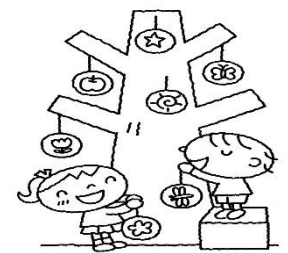
先の保育者は5歳児の特徴を「対話」ではないかと言う。劇の活動では驚くほど子ども同士で話している。現におおぞらの5歳児も劇のあれこれを まーこんなにも飽きもせず話があるものだ と感心させられるくらい対話をする。「あの役はこうだ」「この場面で使う道具はこうだと」 はたはま、相手の演技にまで注文をつけたり、子どもからのより良いアイデアが底をつくことなく湧き出てくる。

劇の取り組みの中で面白さを探求し、その楽

しさを表現する。取り組みのなかで子ども同士のやり取りがあり、活動の終わりに振り返り、また面白さの探求をはじめます。

冒頭でお話した行事名のこだわりで 発表会とうたい、劇に取り組んでいたら こうはいかない、子ども達に与えられる、自由に使える時間の制限も出てきてしまう。 何よりも大人が型にはめ込んでしまおうとする。

5歳児は「ぼんたの自動販売機」と「7匹の子ヤギ」を2グループに分かれ取り組んでいる。子ども達にゆだね、自分たちで取り組んでいくことは時間も必要。それ以上に保育者の忍耐強さが要求される、更には子ども達のひそかな援助者、指導者としての入り方（かかわり）が子ども達の対話やかかわりの力になる。



現在の取り組みは大人が脚本をつくり、音楽を入れたり、歌を入れたりする劇とはちが

い 大人にはわかりづらい部分もあります。子どもの世界で成立することを大人が十分理解できるとは限りません。

劇については十園十色 その園の考えで 取り組みや内容が考えられています。

おおぞら保育園流の劇の取り組みは近隣園ではありません。

私は子ども達にとって良いと思うことはこれからもこだわりたいと思っています。

（ 園長 廣部 信隆 ）

寒さの厳しさを実感する日が続きます。広い空間では室内が暖まるまでに時間がかかります。保育園ではインフルエンザも流行の兆しから外れたのか感染する児童は減っています。ただ油断は禁物です。乾燥した日は続きます。手洗い、うがい、十分な水分を摂取し感染の予防を継続して下さい。

「 劇について考える 」

もう1月が終わろうとしています。3歳児以上の子ども達の生活では劇（劇遊び）が盛んにおこなわれるのもこの時期です。 日ごろ、読み聞かせている絵本をもとに遊びながらお話を再現し仲間と共に豊かな遊びを作っていくというものです。

これから先は今年の園長だよりNo.28を引用し、劇について考えていきます。※加筆、修正有

「 行事名のこだわり 」

前年度（平成30年度）から発表会の名称は使わず4、5歳児（劇の会）3歳児（劇遊びの会）と名称を変更しました。 この時期の生活（活動）の中心に劇活動（劇あそび）があります。

子ども達からすれば発表のために劇を行っているわけではありません。発表会という行事のなごりから当然、劇の会当日も両親や家族にみてもらうことになるのですが子どもの視点から考えてみると「楽しく遊ぶ、または遊んでいる劇を見てもらう日」となります。 大人の間隔からは大きなずれがあることでしょう。